
狩人

シルフィード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狩人

【Nコード】

N8643S

【作者名】

シルフィード

【あらすじ】

何世紀にも渡る、狩人と魔女の争い。

誰も終止符は打てない争いは現代でも続いている。

生きる者、死す者、全てに災いを与える【魔女】

魔女を滅するもの【狩る者】

狩られた魔女の血肉と魂を欲する【喰らう者】

魔女に魂を預け、力を得る【守る者】

そして…

魔女に魅入られた【少女】

不思議な力を持つ少女は魔女に魅入られ、その身を狙われている。

一人の少女の力はどんな意味を示すのか。

少女に関わる全ての者の運命は大きく変化を見せる。

プロローグ

何世紀にも渡る、狩人と魔女の争い。

誰も終止符は打てない争いは現代でも続いている。

生きる者、死す者、全てに災いを与える【魔女】

魔女を滅するもの【狩る者】

狩られた魔女の血肉と魂を欲する【喰らう者】

魔女に魂を預け、力を得る【守る者】

そして…

魔女に魅入られた【少女】

不思議な力を持つ少女は魔女に魅入られ、その身を狙われている。

一人の少女の力はどんな意味を示すのか。

少女に関わる全ての者の運命は大きく変化を見せる。

疑惑？

桜乃丘高校。

ここは特殊なタイプの高校。

3年間で決まった単位をとれば卒業できるシステムで、授業もほとんどが選択制。

その為学年の堺があまりなく、授業に各学年の生徒がいるもの珍しくない。

また、毎月行事がある事もあってか、この学校の生徒には不登校者やサボる生徒は滅多にいない。

だが今年、この学校始まって以来の留年候補生徒がいた。

2年D組 神崎 優。

留年候補で有名と同時に、季節に関係なくハイネックのシャツと制服のブレザーとズボンを着ている事も有名。

現在、1年生の2月以降なかなか授業にも出席しようとはしない。

学校始まって以来の汚点になりつつある。

尽く逃げ切る神崎を、唯一捕獲する教師がいた。

美術系担当教師 月永 龍聖。
つきなが りゅうせい

無駄に開いた黒いYシャツも特徴的だが、ズボンも靴もその大きな体で黒一色な為か、学校では目立つ存在。

唯一大きな手だけは絵の具やインク等でいつもカラフル。

その大きな手で、神崎はいつもどこかで捕まり、まるで猫のように首根っこを掴まれてどこかに連れて行かれるのも、学校では稀に見られると有名な話。

今日もその月永に捕まった神崎は、首根っこを掴まれながら、“美術備品室”に連れ行かれていた。

「ったく。…いつまでそういう生活をする気なんだ？ 折角学生やっつてんだ。少しくらい、青春を謳歌しろ。」

「ん〜…。」

部屋に入ってすぐ神崎を椅子の上におろし、月永ははあとため息交じり。

だが、当の神崎は聞いているのかいないのか、YesでもNoでもない返事をして、窓から見える空を見上げる。

「このガキ…。ここに來て俺の話を見無視するとはいい度胸だな、おい。」

煙草を吸おうと火をつけ、唯一開いていた窓の側にいた月永は、神崎の視線がその窓から先に向いている事に気がつく。

途端にムツとした表情で、神崎の頭を軽く小突いたが、神崎の頭は衝撃で動いた程度で、反応は一切見られない。

「…この空オタクめ。…いい加減真面目に勉強しろ。」

「しない。」

はあとため息をつく月永を一瞬見た神崎は、ボーっとした表情のまま小さな声で答えた。

黙ってその声を聞き、煙草を吸う月永と、また空を見たまま黙ってしまった神崎。

「…まあ、したくねえってのはわかるけどな。…このまま退学にさせられたら、元も子もないだろう?」

「そうそう。このままだと、学校側の暗躍で退学処分、…かもよ?」

神崎が空を見ている間に煙草を吸い終えた月永は、壁に寄りかかり、諭すように話した。

そこに、にこにこ顔の白衣を着た教師が入ってきた。

学校医 天久 璃人。
あまひさ じゅひと

「はい、これ。」

「…。」

にっこりとした笑顔で神崎に近付き、一枚の紙を手渡した。受け取った神崎はざっと目を通すと、天久に返した。

「ね？ そろそろ授業に出ないと、本当にやられるよ？」

受け取った紙を月永に渡すと、月永は『げっ』と小さな声を上げた。

「こりやまずいだろ。…執行部が動いたら厄介だな。」

「ねー。俺たち、執行部の顧問だから…。尚更逃げ場がないと思うけど。」

紙を見ながら話す月永。

天久は苦笑いで神崎に言うが、当の神崎は空を見たままで、まさしく上の空だった。

「おい、こら。お前の話なんだぞ？」

「ん〜…。」

「ダメだね。…しばらく動かない、かな？」

誰が話しかけても上の空の神崎。

月永と天久は、はあと同時にため息をついて呆れていた。

「…今日の放課後から動くつてよ？ 気をつけるよ。」

「無理だな。」

「でも、向こうには成瀬くんなるせがいるからな…。俺たちじゃ助けられないかもしれない。」

紙に書かれた事をそのまま言う月永に、神崎は静かな声で即答をする。

退学を免れる為にと、助けようにも助けられない事情が2人にはあった。

「成瀬は執行部のリーダーだ。結構強引なタイプだからな。…いくらお前でも流石に今回は万事休すか？」

「…授業を出たところで今更挽回は出来ない。…まあ、そこに書かれたわけのわからない言いがかりぐらいなら、どうかわからないがな…。」

助けられないと話す月永が持つ紙を指差し、神崎は椅子をカタンカタンと傾けて体を揺らす。

月永は紙をじっくり読み直すと、不満たつぷりの顔で天久を見た。

「…なんだこれ。」

「ああ、それね。ほら、この子には今、暴力的なイメージがついてるから…」

「喧嘩やめろ。口の利き方直せ！」

「…授業並みに今更挽回出来ないものだと思うが。」

「…だよな…。…なんなんだよ、このでっち上げ！ なんだこの不良行為のオンパレードは！」

「イメージはともかく、それを事実だって言い張られちゃうとね…。」

書かれている内容の不满を口にする月永だが、尽く天久と神崎が仕方ないと否定的。

だが、実際にはどれも行っていない事であるのは確かな為、天久もいい顔はしていない。

「とりあえず、お前は下手に執行部に会っちなよ？」

「…いや、会っちな。」

「じゃあ、ここにいた方がいいと思うよ？」

「向こうが探しているんだ。…どこにいても見つかる。」

忠告をする月永だったが、神崎は首を振った。

天久も心配をするが、神崎は立ち上がり、その部屋を出て行くこととする。

「おい、何かあったら必ず言えよ？」

「執行部の話を、執行部の顧問にするのか？ それもおかしな話だな。」

「んー。成瀬くんって、あんまり大人を信用してないのかな。俺たちに報告してくるのなんて珍しい事なんだよ。」

「へー…。ならオレも信用されないか。」

心配する月永と天久をよそに、神崎は薄笑いを見せて出て行った。

月永と天久はそれを見送るが、その顔は気が気じゃないのか、複雑な表情を浮かべていた。

「…でもまあ、結果オーライか。」

「長い目で、甘く見たらね。」

「…あとはアイツ等次第ってところか…」

「俺は戻っておくよ。何かあったら言っただけ。」

心配しつつ、何かに期待する月永と天久。

放課後を告げるチャイムと共に天久は保健室へと戻っていった。

疑惑？

美術美品室を出た神崎は、放課後のチャイムを聞きながら、ベランダへと出て行った。

2年生の教室がある2階のベランダには、当たり前だが誰もいない。雲の流れる青い空と、少し傾いた太陽を見つめ、手すりに寄りかかる神崎。

校庭に運動部が集まりだした頃、神崎の元に突然、訪問者が現れた。鋭い目つきで神崎を睨みつける1人眼鏡をかけた男子生徒が神崎に背後に。

気配に気づいた神崎は一瞬だけ後ろを見るが、すぐに空へと視線を戻した。

その態度が気に食わなかったのか、男子生徒はじつと睨みつける。

「おい、貴様。今俺の顔を見ただろう。…無視をするつもりか？」
静かに怒りをあらわにする男子生徒だが、神崎は見向きもしない。

『おい』と数回呼ばれるが、全くは反応がない為に、成瀬は話を進める。

「貴様が神崎だな。俺は執行部の成瀬だ。ここに退学処分保留生徒として名前が挙がっている。執行部としては、ここに書かれている貴様の悪行を否定する理由はないとみなし……」

「随分と理不尽な対応だな。」

一枚の紙を広げながら成瀬は説明していたが、神崎は見向きもしない。

だが、決定項として言われた事だけは、遮るように口を開いた。

だからと言って、顔を向けようとはしない神崎に、成瀬は眉をひそめる。

「不服があるなら、それ相応の態度を示せ。」

「不服よりも疑問がある。」

一向に顔を向けない神崎に、成瀬の眉間のしわは更に増えていく。

「……貴様、立場がわかっているのか？」

「裁く者と裁かれる者ってところか。」

「俺が進言すれば、お前はここにいられないんだぞ？」

「それが運命なら仕方がないな。」

「随分潔いんだな。」

「足掻くのはやめたからな…。」

ゆっくりと歩み寄り、成瀬は少し離れた神崎の右横に立った。

「…貴様が何を考えているかは知らないが、聞きたい事がある。それに答えるなら俺も貴様の問いに答えてやる。」

「…。」

「…返事をしないつもりならそれでもいい。だが、答える。ここに書かれている事に事実はいくつつある。」

何も反応をしない神崎に、成瀬は数枚の紙を手渡した。

その紙には被害の内容が箇条書きでびっしりと書かれていた。

受け取り一通り目を通した神崎は成瀬にそれを返す。

「どうなんだ。」

「ゼロ。」

薄笑いで答える神崎に、成瀬は眉を顰める。

だが、ふっと笑い、神崎に不敵な笑みを見せた。

「俺が信じれると思うか？」

「聞いたのはそっちだ。…判断するのはオレじゃない。」

成瀬との話を打ち切るように、神崎はベランダを出て行くつもりでいた。

「ああ、そうそう。…オレへのイメージ、半分間違ってるよ。」

そう言い残して神崎はベランダを出て行った。

「…わけのわからない事を…。」

成瀬は舌打ちをし、神崎の後姿をじっと睨むように見つめた。

ベランダを後にした成瀬は、執行部の教室にいた。

持っていた紙をバサツと机に放り、はあとため息をつきながら椅子に座る。

その姿を見た、2人の男子生徒が成瀬に近付く。

「何か、疲れてるみたいですね…。」

「…ん？ あれ？ この事案、ツバサが片付けて来るって言うってなかつた？」

「…、伊吹、稜雅。この話、何かありそうだ。」

「うわ…、マジ？」

「御剣先輩、そんなあからさまな顔しなくても…。」

険しい目で紙を睨みながら、成瀬が答えた。

御剣と呼ばれた金髪の男子生徒があからさまな嫌な反応をする。

すると、伊吹と呼ばれたたれ目の男子生徒は御剣を呆れたように声を掛けた。

「それで、成瀬先輩。何か引つかかる事があるんですか？」

「…ああ。今この神崎に会った。」

「え！？ 会えたの？ 超レアな体験なんですよ？ あの子に会うのって。」

「他の学年の勝手な迷信ですよ。…ほら、聞きましょう？」

成瀬は先程の話をしようとしたが、興奮気味の御剣がそれを止めた形になった。

それを止める伊吹は、成瀬の睨む顔に苦笑いを見せていた。

「…。あいつはこの被害の数々を全面否定している。」

「…え？ それを信じたの？」

「いや…。ただ引つかかるのは、俺が聞いていた話からはかけ離れた印象を得た。確かに口や態度は悪いが、…暴力的かと言われると疑問が残る。」

「じゃあ、その調査を？」

「ああ。まだどういふ人間かわからないからな。それがわかるまではこの件は保留になる。」

どういった調査の仕方をしようかと、伊吹と成瀬はしばらく話し合っていた。

そういう事が苦手な御剣は離れた所にいたが、何かひらめいたように成瀬たちに近付く。

「ねえねえ。会えるかどうかの場所を探すよりさ、あの子と親しい人に聞いた方が早いんじゃない？」

「親しい？」

話に割り込んできた御剣を睨みつけていた成瀬だが、思わぬ提案に話を聞く事にした。

「月永先生。だって、時々猫捕まえたみたいに連れて行かれてるし。」

「だったら、天久先生もそうかもしれない…。俺、時々一緒にいるの見掛けましたから。」

「…うちの顧問か…。…なら話は早い。行くぞ。」

話を聞くなり、成瀬は伊吹と御剣を連れ、教室を出て行った。

疑惑？

成瀬は御剣と伊吹を連れ、美術美備品室に訪れていた。

煙草を吸おうとしていたのか、月永は開いた窓の前で煙草を銜えている。

「ん？ 執行部の面々が…、珍しいな。なんだ？」

煙草を箱に戻し、月永は作業機の椅子に座る。

成瀬たちは部屋に入り、成瀬はじつと月永を睨むように見る。

「神崎について知っている事を話していただきます。」

「いただきます？ いただけませんか？ じゃないのか？ …って、その顔は強制って事かい。」

成瀬の目を見た月永は、はあとため息をついたが、急に、まるで考え事をしているように真面目な顔になり、じつとしていた。

「あ、逃げようとしてない？」

「多分、違うかと…。」

「なんでもいい。…話してもらいます。」

ズイツと前に出た成瀬に、月永はさっきのような凜々しい真面目な顔はどこにもないくらい、困った顔を見せた。

「…うー…ん。俺が答えられるような事はないと思うんだが。」
「答えてください。神崎から受けたという被害、どこまで事実だと思えますか。」

「なんだ、あくまで俺の意見か？」

「はい。」

「だったら、ゼロだな。」

成瀬の問いに月永は即答をした。

それは神崎と同じ答えで、成瀬の眉間にほんの少ししわが寄る。

「神崎と同じ答えですか…。では、その根拠は？」

「は？ そりゃアイツが本当に手を下したら、被害届けなんて届かないか…」

「はいはい、そこまで！」

開けっ放しの扉から現れ、月永の言葉を遮ったのは天久だった。

天久はムツとした顔で月永を少し睨む。

「そんな言い方、人聞きが悪いよ？」

「いいじゃねえか、別に聞いて…」

「…。」

天久の後ろから現れた神崎の姿を見て、月永は絶句した。

青くなり、冷や汗をかいている。神崎は月永の顔をじっと見る。

「い、いたのかよっ!？」

「…。」

無言の怒りを感じたのか、月永はシュンと大人しくなる。

「あれが、神崎って子？」

「はい、そうです。」

「…。」

神崎の登場に驚いた執行部の生徒たちは、じっと神崎が椅子に座るのを見ていた。

「さてと。この子の話を聞くなら、直接本人が良いかなあと思って、連れて来たんだけど？」

にこやかに天久が言う。

神崎は黙って開いている窓から空を見始めた。

「…貴様、俺と話がしたくないから出て行ったんじゃないのか？」

「…。いいや。頭の中の整理をつけてもらおうと思ったただけだ。…随分困惑していたみたいだったからな。」

「困惑…？ 俺がか？」

「…他にいたか？」

薄笑いで成瀬の問いに答える神崎。

あきらかに怒りの形相で神崎を睨みつける成瀬に気がついた伊吹が、話を進めようと慌てる。

「あ、あのさ！ この被害届けの事実、みんな否定したんだろ？」

何かこつちが信用できるものとか、見せれないのか？」

「…。この被害届けを出した人間に、おかしな様子はなかったなら、何もないな。」

「おかしな様子…？」

神崎に答えを聞いた伊吹は、ふと何かを考え始める。

「あ！」

「あ！」

すると、御剣と同時に声を上げた。

神崎以外の全員が伊吹たちの顔を見ると、伊吹は持って来ていたフ

アイルをめくり、確認するようにページをめくっていく。

「なんだ？」

「やっぱり…。」

ファイルから抜き取った数枚の資料を見せ、伊吹は紙の隅に書かれた丸を指差した。

「これ、御剣先輩が『変な気配がする』って言った時につけていたんですけど…神崎の話を持ってきた人間全部についてるんです。」

「そうそう！なんか変な気配がするんだ。においていうか、雰囲気っていうか…。最近多くてさ。」

伊吹と御剣の説明を聞くと、成瀬は神崎に視線を向ける。

考えている素振りも見えない、話を聞いているのかわからない神崎を睨みつける。

そんな視線はお構いなしに黙って空を見上げ、暫く長い沈黙が続いた。

疑惑？

しばらく沈黙が続くと、痺れを切らした成瀬が立ち上がる。

「貴様、処分対象になっている事、わかっているのか？」

「処分ね…。まあ、あと1分待とうよ…。」

「待っていてられるわけが…」

「あと1分で犯人見つかるからさ。」

けだるそうに話す神崎。

明らかにイライラとしている成瀬だったが、神崎の言葉と共に動きが止まる。

「…論より証拠って言わない？」

「なに…？」

「ほら。」

窓の外を指差す神崎。

成瀬がその方向を確認すると、下の階では数人の生徒に一人の生徒が囲まれていた。

「…なんだ、あれは？」

御剣と伊吹もその窓を覗く。

そこではあきらかなカツアゲが行われていた。

「止めなきゃ！」

御剣たちがその場所に向かおうとするが、神崎が御剣と伊吹の服の袖を掴み、それを止める。

「どういづつもりだ。」

「まあまあ。今は見ている。」

黙ってその行動を見ていた3人。

「あー！」

「アレって…」

「…。」

すると、囲んでいる生徒のうちの一人が、禍々しい雰囲気をもっている事に3人が同時に気がつく。

そのオーラはそこにいた生徒全体を包み、しばらくすると囲んでいた生徒達はその場から歩き去っていった。

「…アレは、魔力…？」

「さて、あの生徒も走っていなくなつたし、執行部に被害届けでも出してるかもね。」

神崎がいまだ落ち込む月永の横にある椅子に腰をかけ、驚く成瀬たちに言う。

しばらくすると、成瀬の携帯が鳴った。

「……………」

携帯に届いたメールを読んだ成瀬は驚いた顔を見せた。

「どうしました？」

「…確かに被害届けはきたようだ。」

「え？　じゃあ探しに行かなきゃ。あの生徒たちの名前は？」

「…神崎、貴様の名前が書かれているそうだ。」

メールの内容の一部を伝える成瀬。

てつきり今見た生徒たちの誰かの名が出るのかと思えば、メールには今日の前にいる神崎の名が書かれていた。

「そんなわけないですよ！」

「わかっている。…つまり貴様は、俺たちをアリバイとして使ったのか。」

「人聞きの悪い。…論より証拠と言っただろ。」

薄笑いを見せる神崎を成瀬は普段より弱く睨みつけた。

どちらかというと、悔しそうな目だ。

「それでも処分するのか？」

「…。いや、処分はしない。」

しばらく黙っていた成瀬の顔が徐々に不敵な笑みへと変わっていく。

すると、成瀬は神崎から離れた直線状に立った。

「…貴様に聞きたい事がある。」

「…。」

そつぽを向いたままの神崎は何も答えない。

「成瀬先輩、どうしたんですか？」

「ツバサ、早くその被害届けを出した子に会わなきゃダメなんじゃないの？」

「…こいつから聞くのが先だ。」

何か不穏な空気を察知した伊吹が不安げな表情を見せる。

だが、成瀬は鋭い視線を神崎に向けたまま。

「聞きたいこと、ねえ…。言葉では、なさそうだな。」

「そうだ。貴様の身体に聞くー!」

大きな声を出したかと思うと、成瀬は突然手を前に突き出した。

「え、まさか…」

「ちょっと！一般人にそれはダメだつて!」

伊吹と御剣が止めると、神崎がゆっくり立ち上がり、成瀬にほんの少しだけ近付いた。

「そんなに知りたい?」

「…何者だ、答える。」

「…んー…。言っても信じないんだもんなあ…。」

神崎は睨みつける成瀬の顔をチラッと見ると、はあとため息をついた。

「…まあいいか。思惑通りらしいし。…」

独り言をボソツと言うと、ゆっくり窓の方へと足を向けていた。

「様子見? …まあ賢明な判断か。下手に手を出したら何が起きるか予測できないわけだし。…でもねえ、ここで何かしようなんて無謀な事はしないよ。」

次第に窓へと近付いていく神崎に、成瀬は冷たく凍てつくような怒りの目を向ける。

神崎はその目をものともしない薄笑いを見せる。

「あんと同業者であり、異質な存在ってところか。」

「…敵でも味方でもないという事か。」

「そういう事。…だが力を持つものとして助言をすれば、…さっきの奴、放っておく手遅れになる。」

「どづいっ…」

あっけに取られる全員を後目に、成瀬はじりじりと神崎に近付こうとする。

だが、神崎は何を気にすることなく、開いた窓を背に立つ。

「オレが頂いちゃうから。」

そう言っつて神崎は開いている窓から飛び降り、走り去ってしまった。

「ちっ。あいつが何者かまだわからない！ 神崎を見つけて阻止しろ！」

「は、はい！」

「了解！」

成瀬の掛け声と共に、成瀬たちは神崎を追ってその部屋を飛び出した。

「あゝあゝ。わざわざ焚き付けなくても…。」

「これも結果オーライ、なのかな？」

「…遅かれ早かれ、こうなってただろうからな。」

ため息とつく月永と天久。

神崎が走り去って行った方角を見ると、階段を駆け下りた成瀬たちが、同じ方向を走っていく。

その光景を見た2人はふっと笑い、見守るように見ていた。

疑惑？

2階の窓から飛び降り、神崎は禍々しい雰囲気をもとう生徒たちを追って行ってしまった。

成瀬たちもそれを追いかけるが、既に誰の姿も見られない。

「稜雅、何か感じ取れるか？」

「あつちから嫌な雰囲気はするんだけど…。…なんか、別の気配も増えた気がする。」

「別の気配、ですか？」

「うん。あの子に似た気配なんだけど、もっと強い気がするんだ。」

「とにかくあの方角なんだな。稜雅、案内をしろ。」

「わかった！」

御剣を先頭に、成瀬たちは禍々しい雰囲気をまとう生徒たちの搜索を始めた。

御剣の言う別の気配を考えを巡らせながら、3人は使われていない、空きの教室前までやってきた。

「ここみたい。」

「…ここは、今は空いている教室です。時々不良グループが使って

いるとかで、問題になってからは、鍵は執行部の部屋に置かれて
いるはずですが…。」

「開いているという事は、誰かが持って行ったんだろう。」

「あ、ツバサ！ …中に誰がいるよ。」

教室の窓は空きの教室を示す張り紙で塞がれていた。

隙間から中を伺うと、そこには先程の禍々しい雰囲気をもつた生
徒たちと、見覚えのある後ろ姿。

「あ！ 神崎だ！」

「ちつ。やはりいたか。」

「…なんか、既に危険な感じ？」

禍々しい雰囲気をもつた生徒たちは、神崎を大声で怒鳴りつけて
いる。

廊下まで聞こえるような声だが、神崎の声だけはあまり聞こえない。

ただ、口を開いた神崎に激昂した生徒たちが、身構えているのだけ
は見て取れた。

「…あの笑い方見ると、挑発したとしか思えないよね。」

「今にも殴りかかりそうですから、そうですね。」

「…馬鹿な奴だな。」

「あの、行かないんですか？」

「仮にも力があるらしいからな。…お手並み拝見だ。」

様子を伺いながらニヤリと笑う成瀬を、御剣と伊吹は苦笑いで引いていた。

中では全く動こうとしない神崎が、生徒たち全員に囲まれていた。

大柄な生徒だけがその輪から外れている。

「…あれがリーダーかな？」

「恐らくな。…だが、見掛けない顔だな。」

「俺もです。…名前どころか、学年もわかりせんね。…制服を着た部外者かな…。」

「え！？ そんな手の掛かる事してまでここでイタズラしたかったの？」

「…知りませんよ。まだ部外者がどうかもわからないし。」

憶測を展開していると、神崎は大柄な生徒の前に立っていた。

周りにいたはずの生徒たちはバタバタと倒れていく。

特に何をしたわけでもないはずだが、成瀬たちは何が起きたのかわ

からない。

「え？ 何で倒れてるの!？」

「…成瀬先輩。これは…。」

「…本当に能力者らしいな。」

「じゃあ、俺たちの事に理解があるって事？」

「だと思えますけど…。」

「やった！ じゃあ、絶対友だちになろうっと！」

「何をのん気な事を言ってるんですか!？」

伊吹の呆れた声も、成瀬の呆れた表情も見えない様子で、御剣は満面の笑みで神崎の様子を伺う。

その神崎は大柄の生徒の前に立ち、成瀬たちには背を向けている。

ただ、その大柄の生徒は焦ったように顔を真っ青にし、傍から見れば追い込まれているようだった。

「…なんかさ、出る幕なし？」

「…そうかもしれませんね。」

「やっぱり強いのかなあ？」

難しい顔で神崎の様子を伺う成瀬。

御剣や伊吹の話は耳に入っていないようだ。

教室の中の神崎は、さっきより大き目の声で、大柄の生徒と会話をしている。

『聞いた話と違う！ 何故お前がここにいるんだ！』

『知るか。』

『くそ！ このままではピーク様に消されてしまっ…』

「ピーク様って誰だろうね。」

「そ、そんな事聞かれても…。」

「黙ってる！」

成瀬の怒鳴り声がしても、教室の中の2人は振り向きもしない。

青ざめる大柄の生徒は、後ずさりをしてその場から逃げようとしているようにも見える。

神崎は相変わらず成瀬たちに背を向けたまま、動こうとはしない。

『先に貴様から始末するしか…。』

『魔女に感化されただけの人間が、オレに喧嘩を売ると？』

「魔女！？　今あの子、魔女って言ったよ！！」

「黙ってる。」

口元に手を置いていた御剣は早々に手を外し、興奮した様子で、叫ぶように声を上げる。

案の定成瀬に注意され、また口元に今度は両手で押さえた。

『俺は消えない！　貴様を始末して、ピーク様に…っ！！』

『…馬鹿な奴だな…』

『なっ…』

かなりの距離を取っていた大柄な生徒は興奮していた。

鼻息荒く、意を決したように神崎に突進を試みる。

ところが、神崎に触れるか触れないかのところで、大柄な生徒は光の粒になって跡形もなくなってしまった。

光の粒は次第に集まり、腕を伸ばした神崎の手の平の上で大きな光の玉になった。

『…。おい、居るんだろ？』

「今の、何…？　俺、あんなの見たことない！」

「…。」

神崎の呼び掛けられ、成瀬たちは教室の中に入った。

光の玉を眺めていた神崎はクルツと振り向き、御剣の前に立った。

「コレ、いる？」

「え？ いいの!？」

「…なんか、弱々しくて話にならないし。…魔女の力もあるみたいだから、うまいんじゃないか？」

爛々と目を輝かせる御剣に、神崎は光の玉を放って渡した。

受け取るなりその光の玉を嬉しそうに眺める御剣は、伊吹の呆れ顔も、成瀬のきつい睨みにも気がつく気配がない。

「ありがとうございます！ いただきます!!！」

光の玉をじっくり眺めた御剣は大きな口を開けて、その玉をパクンと食べてしまった。

とろけそうな顔で堪能し、幸せそうな笑みを浮かべる御剣。

伊吹と成瀬はあからさまに引いていた。

「んっま〜…。ありがとうね、優ちゃん！」

「優ちゃん？」

「あ、ダメ？」

「いや、構わない。」

「やった〜」

御剣は神崎の手を取り、握手をした。

少し大きさに腕を上下に振り、かなりご満悦の様子。

神崎は何も言わず、任せていた。

「おい、貴様は何者だ？」

「敵でも味方でもない、そう判断したんじゃないのか？」

「はつきりしたのは立場だけだ。正体も目的もまだわかっていない。」

「

「なるほど。まあ、今日はそこにいる連中の事もあるだろうし…。」

「話は明日にしないか？」

「貴様が指図する気か？」

成瀬は神崎の前にズイツと立ち、御剣との握手を強制的にやめさせた。

睨みつける成瀬の目はあまり見ずに、神崎はフラフラと教室の壁に

寄りかかった。

「…話をしたいのはそっち。オレじゃない。不服ならオレは帰る。」

「帰すわけがないだろう。」

「…その態度、改めるんだな。日本人のクセに礼儀も知らんのか。」

「年上に敬語も使えない貴様がという言葉か？」

「…年上ねえ…。まあいい。今日は話したくないんでな。帰る。」

「何を言っ…」

壁の側にいた神崎は、一步前に足を出すと、真っ白な光に包まれた。神崎の足元には絵のようなものが描かれている。

「退路は作っておくもんだろ？」

手を一度振ると、神崎は強い光と共に消え、描かれていた絵も消えてしまった。

「…ポータル、作ってあったんだ…。」

「おお、ツバサから逃げ切ったよ！　すごいねー。」

「感心している場合か。…伊吹、アイツについて調べておけ。」

「あ、はい。」

伊吹と御剣はこの状況下から逃げ出せた神崎に感心し、成瀬は神崎が消えた所をただ睨みつけていた。

正体？

次の日。

昨日の神崎の逃げ方をまだ根に持っている成瀬は、その日一日機嫌が悪かった。

授業を担当している教師ですら、一步一線を置くほどイライラの才イラが漂っている。

午前中だけで授業を終えた成瀬は、頭を冷やそうと、昼食の後からは時々足を運ぶ5階の小さなバルコニーに向かっていた。

そこは、陽もよく当たるが日陰もある為、考え事や読書の時にはいっつも利用している場所だった。

だが、その日は先客がいた。

「…。」

そこには、バルコニーの壁に座って寄りかかる神崎がいた。

腕を組み、俯いている。

「…ちつ。」

成瀬は舌打ちをし、バルコニーを後にしようとした。

だが、唯一の出入り口は、ひとりでに勢いよく閉まってしまつた。

「！」

手をかける寸前で勢いよく閉まり、驚いて一歩引く。

開けようと手をかけるが、その引き戸は全くびくともしない。

まっさきに神崎を睨みつける成瀬だが、神崎は体制も変わらず俯いたまま。

「おい、なんの真似だ？」

「…。」

ツカツカと俯いたままの神崎の前に立ち見下ろすが、神崎は全く反応を見せない。

「…無視する気か？」

冷徹な目になった瞬間、成瀬は神崎の頭に持っていた本を縦に当てた。

かなり大きな音で、強く当たったはずだが、身動きはしない。

「…随分乱暴な起こし方だな…。」

体制は変わらないままに、神崎は口を開いた。

「早く開ける。」

「…。」

黙っていた神崎はふつと顔を上げ、唯一の出入り口をじつと見つめた。

「あ…。厄介な事を…。」

「なに？」

はあとため息をつきながら、膝を抱えるように座りなおすと、神崎は自分の膝に顔を埋めた。

「…おい、説明しろ。」

「閉じ込められた。」

「なに？」

「この空間に閉じ込められた。」

ほんの少し顔を上げて、じつと封じられてしまった引き戸を見据える神崎。

「…お前じゃないのか？」

「違う。…んー。予想以上に行動に移してくるのが早いなあ…。」

神崎は、はあとため息をついて自分の頭をポンポンと叩いている。

「なにを言ってるんだ？」

状況が飲み込めない成瀬の顔を一瞬見上げ、神崎は何かを思い出したように『あ。』と声を上げた。

「折角外界隔離されてるし、お話でもしようか。ここなら誰も干渉出来ない。」

「…わかるように説明しろ。あれは誰がなんの目的でやったんだ？」

「んー…。この力の主は魔女。目的は…、多分オレたち。」

「オレたち？ どういう事だ？」

「オレの力と、坊っちゃんのが欲しいんだろ。」

顔を半分自分の膝に埋めたまま答える神崎は、全く成瀬の顔を見えない。

それでも成瀬は神崎を睨みつけていた。

「坊っちゃんだと？」

「由緒正しき狩人の家系、だろ？」

「…何故、それを知っている。」

「ついでに、あの金髪は狼で、もう1人はお仕えだったのも知って

るけど？」

「…貴様…。」

睨みつけ方がかなり強くなつていく成瀬だが、神崎は相変わらず無気力な目で地面を見据えている。

「ま、いつか何故オレが坊っちゃんたちの正体を知っているかわかる。」

「もったいぶっていないで、今答える。」

「そうだなあ。坊っちゃんが魔女の力の判別が出来て、弱小でも魔女を狩れる技術を持つて…。金髪狼が魔女の魂に拒絶反応しなつて…。お仕えがまともに坊っちゃんをサポートできるようになったら、教えてやる。」

「条件が多いな。…何様だ。」

「…確かにフェアではないか。」

やれやれと言わんばかりに、神崎はけだるそうに立ち上がり、封じられた引き戸の前に立った。

すると突然、神崎の体は真っ白な光に包まれていく。

あの光は次第に手に集中し、神崎はその光を引き戸にゆっくり当てた。

途端に白い光は弾け飛び、消え去ってしまった。

遠くから見ている成瀬だったが、消えていった光を見ながら神崎に近寄る。

「…これは、浄化の力…？」

「お、本の知識は豊富なわけか。」

ふっと神崎は笑い、グーツと体を後ろに反らせ大きく伸びをし始めた。

「聖女の力…」

「聖女？」

「浄化の力は神に仕える者の力だ。…貴様に信仰心があるようには見えないが？」

「神、か…。ま、神さまからもらった力には変わりないかもしれないな。」

「…。」

納得のいかない顔をする成瀬だが、神崎はそれ以上何も話そうとはしなかった。

「はいはい、おしまい。…オレの側にいると、一緒に狙われるのはわかったら？」

強制的に話を終わらせようと校舎に戻ろうとする神崎。

だが、その足はピタッと止まった。

「…なんだ？」

「坊っちゃん。…手、出せ。」

「何故だ？」

突然歩みを止め、成瀬の方に顔だけ向けて手を差し出す神崎。

だが、成瀬は理由を話さない限りは手を出す気がないらしく、身動き一つしない。

「…ちっ」

途端に、神崎は舌打ちをしながら、強引に成瀬の手を取った。

正体？

成瀬の手を取り、神崎はグイッと手前に引き寄せる。

途端に、成瀬がいた場所には大きな音共に何か落下して来ていた。

「!!!」

その音に驚き、成瀬は砂煙の立つその方向を見るが、全く何も見えない。

冷静になり始めると、ふと自分の肩にある手の方が気になった。

引き戸の前の段差に登っていた神崎の身長は、丁度成瀬と同じくらい。

成瀬は神崎に肩を抱かっていた。

「…おい、これは…」

「これ？ 落下物？ それとも体制？」

「両方だ。」

すぐ真横にある神崎の視線は、じっと落下物に向けられていた。

成瀬の肩を持つ手は、小さいながらも力が強く、成瀬が軽く動いた

ところで抜ける事は出来なかった。

「その落下物は、魔女の贈り物だね。…あゝ、本当に厄介だ。」

砂煙を上げていた辺りが、次第に晴れていく。

見えてきたのは、黒い球体。

その球体には赤く光る絵のような文字が所狭しと描かれている。

「…なんだ、これは。」

「あゝ…、本当に厄介なモノを落とすやがって…。」

神崎はけだるそうにため息をつきながら言うと、体に真っ白な光を帯び始めた。

その光はバルコニー全体を囲んでいく。

「…ここを封じるのか？」

「アレ、爆発物だしね…。」

「…俺たちはどうする気だ？」

「まあ、そこから逃げようか。後ろの戸は二重に封じられちゃったから、更に厄介なんだよ。」

何を言ってるんだという顔で見る成瀬だが、神崎の視線は目の前の球体に向けられたまま。

その球体がブルブルと動き出すと、神崎は成瀬の腕を抱えるように引っ張り、バルコニーの奥へと走った。

「おい！　ここ、5階だぞ！」

「15mくらいなら、死にはしないだろ。」

「馬鹿か、貴様は！？」

「あらら。珍しく焦ってらっしゃる。」

成瀬の背よりも高いバルコニーの壁に上ろうとする神崎の腕をグイッと引っ張り、成瀬は慌てて制止した。

「…安心しろ。絶対無事に降ろすから。」

「な…！？」

その小さな体から出ているとは思えない力で成瀬を引っ張り上げ、神崎はそのバルコニーから成瀬と共に飛び降りた。

成瀬は温かい感覚に包まれていた。

体というより、心が温かい。

今バルコニーから飛び降りたはずなのに、落下している感覚ではなく、浮遊感がある。

成瀬は温かさと浮遊感が心地よくなっていき、次第に意識が薄れていった。

その朦朧とする中、成瀬は何かを見てた。

「あ、起きた？」

「…ここは…。」

成瀬が目を覚ましたのは保健室。

ふっと起き上がると、そこには天久がヒラヒラとにこやかに手を振っていた。

「俺は…？」

「まだ混乱してる？ でも先生にも全く事情はわからないよ？ 神崎さんが連れてきてくれたんだけど、その連れてきた張本人はさっさといなくなっちゃったんだよね…。」

「…どこに行っただかわかりますか？」

「んー…。なんか探すって言ってたけど…。先生にはさっぱり。」

天久が苦笑いで手を広げると、成瀬ははあとため息をついた。

意外にいつもより軽い体を起き上がらせ、成瀬はスタスタと保健室を出て行くこうとする。

「あ、神崎さん探すの？」

「ええ。聞きたいことがあるので。」

「じゃあ、見つけたら伝えてくれる？『お願いね』って。」

「…。わかりました。」

脈絡のない伝言を頼まれた成瀬は、それ以上は聞かず、天久に手を振られ見送られながら保健室をあとにした。

正体？

目を覚ました成瀬は、真つ先に執行部の教室へ足を運ぶ。

「…。」

そこには誰もいない代わりに、いつも成瀬が座る机に一枚のメモ用紙が置かれていた。

「白紙…。…誰のイタズラだ…。？」

成瀬はその白紙のメモ用紙を手にし、じっとそれを見つめた。

「…微弱な力…。？」

メモ用紙にある何かの力が付いた成瀬。

だが、開いていた扉から急に現れた神崎により、そのメモ用紙は奪われた。

ボンッ

途端にそのメモ用紙は神崎の左手の中で小さく爆発し、燃え散った。

「あゝ…。…危ないな…。。」

高く左手を上げた為、火の粉は消えながら神崎の頭上を散っていく。

「貴様、どうしてここに…」

「いや、弱い力を辿ってきたらここに着いたっただけ。」

神崎はさっさと入ってきた扉に戻っていくが、成瀬の問いかけと同時に歩みを止め、体を横に向けて答えた。

「…さつき、何があったんだ？」

「なにがって、バルコニーから飛び降りただけだろ。」

「なんで無傷なんだ？」

「…なんでって言われてもなあ…。」

ポリポリと頬を掻き、それ以上答えなくなった神崎を、成瀬は疑うような目で見た。

成瀬の知る魔術の中には、浮遊感が起きるようなものはない。

神崎が使った力は一体なんなのか、気になって仕方のない成瀬は、神崎に少し詰め寄る。

「…。」

「まあ、今度機会があった時は意識しつかり持てばいいだろ。そしてたら口で言うよりわかりやすく見えるんだから。」

その場から出ようとした神崎だったが、またふと足を止めた。

「あれ？ ツバサと優ちゃん？ 何してるの？」

「あ、もしかしてお邪魔ですか…？」

「いや、オレの話は終わったから。」

「…。」

執行部の教室に神崎と入れ違いで入ってきたのは御剣と伊吹。

成瀬が出て行く神崎を目で追っていたのを確認するなり、伊吹は教室に入った足をすつと引いた。

だが、神崎は振り向きもせず、ヒラヒラと手を振りながらその場を立ち去っていった。

「…ん？」

教室に入った御剣は、何かに気が付いたようにクンクンと辺りの匂いを嗅ぎ始める。

「…焦げた匂いと血の匂い…？」

首を傾げながら成瀬に聞くと、成瀬は納得したようにああと答えた。

「…今ここに呪符が置かれていたんだ。」

「呪符、ですか。誰がそんなものを…」

伊吹は率直な疑問を呟くが、誰もその答えは出なかった。

「待て。稜雅、血の匂いと言ったか？」

「うん。焦げた匂いに混じって結構濃い匂いがするよ。」

クンクンと嗅ぎなおす御剣は、改めて成瀬に答えた。

血の匂いの正体は、成瀬の中で瞬間的に答えが出た。

「…。まさか、あいつ…?」

「え？ 優ちゃんなの？ 結構濃い匂いだよ?」

「そんな大怪我しているようには見えませんでしたけど…」

伊吹も御剣も、神崎が特に違和感なく歩いて行ったのは確認している。

だが、成瀬にも心当たりはあった。

「あいつが呪符を取り上げてから爆発したんだ。可能性はある。…
稜雅、血の匂いを辿れ。」

「え？ 了解。」

戸惑いながらも、御剣は先頭に立って匂いを嗅ぎながら歩きだした。

正体？

匂いを辿っていくと、ついさつき成瀬と神崎が飛び降りた5階のバルコニーに行き着いた。

神崎は床に膝をつき、何かを探しているようにゆっくり辺りを見渡している。

「おい、神崎。」

「あれ？」

突然現れた成瀬たちに一瞬驚いたような顔をするが、御剣の顔を見てああと声を上げた。

「…匂いか…。」

はあとため息をつき、立ち上がる神崎。

成瀬はツカツカと神崎に近付き、じつと神崎を睨むと、ふっとブレザーのポケットに入れられた左手を睨むように見据えた。

「…左手、だつたな。見せる。」

あゝ…と誤魔化そうと声を上げ、ポリポリと頬を搔く神崎。

一向に左手を出そうとしない神崎を睨みつけ、成瀬はすぐ手の届く

所まで近付いた。

「いいから見せろ！」

大きな声を上げると共に、成瀬はブレザーから無理矢理から左手を引き抜いた。

「…！」

「怪我してるってわかってるなら、もうちょっと優しくしてもらいたいもんだね。」

はあとため息をつく神崎の左手は、成瀬は驚き、御剣と伊吹が焦る程の火傷を負っていた。

真っ黒に爛れた左手は、なんの処置もされておらず、誰がどう見てもこのまま放置していれば悪化するような火傷だった。

「神崎。これはまずいつて。もろに爆発受けたんだろ？」

「今治療して、今治るわけじゃないだろ？ そんな時間を割くくらいなら、オレはやる事を…」

離れていた伊吹と御剣も近付き、神崎に治療をすすめる。

その間にも神崎は成瀬から自分の左手を振り払うように離していた。

だが、途端に成瀬は神崎に左腕をさつき以上に強く掴んだ。

「…」。今日はイヤに暴力的だな。…なんか恨みでも？」

「恨み？ いや、呆れているだけだ。来い。」

成瀬が強く神崎の腕を引っ張るが、神崎はふっと煙のようにその場から姿を消した。

「一応言っとくけど…。オレは逃げるのだけは得意だよ?」

成瀬たちの目の前から消えた神崎は、いつの間にかバルコニーから出て、校舎の中にいた。

成瀬たちに声をかけ、また煙りように消えてしまつと、成瀬は焦りの表情を見せた。

それは御剣や伊吹と同じように、火傷の具合を心配しての焦りだった。

「ちっ。」

「さとちゃん、あれ絶対ヤバイ怪我だよね?」

「…あのままじゃばい菌が入ってもおかしくないです。」

「探すぞ。」

苛立ちを見せた成瀬は、同じように御剣を先頭に神崎を探そうと校舎に戻った。

だが、御剣は何度も匂いを嗅ぐが、首を傾げて動こうとはしない。

「あれ！？ 優ちゃんの匂いが一切感じられない…？」

「え！？ だってあんな怪我してるのに？」

何度確かめても見つからない神崎の匂いに、御剣は焦りの色を隠せない。

匂いがダメならしらみつぶしに探すしかないと考えた成瀬は、御剣より前に立ち、先頭を切った。

「…面倒な奴め。結界でも張ったんだろう。…早急に探し出すぞ。」

広い校舎の中をしらみつぶしに探し、あてもなく歩き回る3人。

放課後という事もあるせいか、部活動をしている生徒以外はほとんど校舎に残っていない。

だが、それでも執行部の生徒が動いていると目立つせいか、どこに行っても注目を浴びていた。

3人は5階から順に下って行った。

天久や月永の元にも向かったが、そこは全てハズレで、ヒントすら見つからなかった。

埒が明かないと判断した成瀬は、手分けして神崎の搜索に当たる事にした。

成瀬がしらみつぶしに寄ったある教室。

そこは、昨日神崎が不良たちといざこざを起こした教室。

鍵が見つからないまま開けっ放しになっていた教室には、人影があった。

不審に思った成瀬が様子を伺うと、そこにはバルコニーにいた時と同じように、膝について何かを探すように様子を伺っている神崎がいた。

「見つけたぞ。」

成瀬の声に気がつき、すっと立ち上がる神崎。

へえと感心すると、成瀬の姿をじっと見据えた。

「鬼ごっこは終わりだ。」

怒り心頭の成瀬は、ツカツカと神崎に近寄り、キッと神崎を睨みつけた。

だが、神崎はふっと笑って後ずさりをした。

「鬼ごっこ？ それともかくれんぼって言うのか？ …ま、どっちにしてもした事ないからわかんないけど。…でも、鬼ごっこって捕まえたら終わりなんだから？」

「…。」

ただ黙って睨みつける成瀬にはお構いなく、神崎は成瀬に背を向けて教室を出ようとする。

「ま、たかが怪我で足止めされんのも癪なんでね。」

教室を出ようと扉の側に立つと、神崎がピタッと動きを止め、ゆっくり顔を横に向けた。

成瀬は追いかけるつもりで神崎の後ろにいたが、その横顔があまりに異様な雰囲気だった為に、それ以上動かないでいた。

「…。」

「今度はなんだ。」

「…なんだ、人質取って勝者気分か？」

ふつと鼻で笑う神崎が完全に成瀬の方に向き直り、じつと成瀬の後ろを睨みつけていた。

正体？

成瀬もつられるように後ろを向くと、そこには御剣と伊吹の姿が。

しかも明らかに体は縄で縛られている。

その縄の先を持っているのは1人の女子生徒。

「な!？」

「ごめん、ツバサ…。」

「すみません、成瀬先輩…。」

申し訳なさそうにする御剣と伊吹たちの状況を見て、成瀬は驚いた顔を見せた。

そんな成瀬の少し前に、神崎が気だるそうに立つ。

「…あゝ、厄介だ。…卑怯な手は変わらないわけか。」

「卑怯だなんて、最高の褒め言葉じゃない？ 嬉しいわ。」

制服には似合わない妖艶な顔立ちのその女子生徒は、クスクスと笑う。

神崎はあとため息をつきながら、間合いを計っていた成瀬の前に手をすつと出した。

「へいへい。じゃあ、その卑怯なピークさま。その2人は返しても
らえます?」

「いやよ。返すわけがないじゃない。…まさかこの子たちとこんな
に早く接触するとは思わなかったけど。」

「いや、オレは全くする気はありませんでしたけどね。…手違い?」

「大方、取り巻きが先走ったのね? 無能な部下を持つと苦労する
わね、お互い。」

「まあ、先走った事は否定しないが…。無能でも部下でもないから
ねえ…。お前と違って見境なく精気吸ったりしないし。」

「だって、若い子の魂っておいしいんだもの。…あなたは嫌いだっ
たかしら?」

「魂自体興味ないんでな。」

「あら、取り巻きにあげちゃうの? 優しい聖女様ね。」

「そらどうも。…さて、本題と行くか。」

成瀬がもう前に出ようとしていないのを確認すると、神崎は手を置
くのをやめた。

ピークと呼んだ女子生徒を真正面にするように向き直り、呆れた声
で口を開きはじめる神崎。

だが声とは裏腹に、後ろから見ていた成瀬にも正面から見ていた御剣や伊吹にも、神崎のその目はいつもとは全く異なつた雰囲気を感じとっていた。

「お前に手引きした奴は目星が付いているが…。お前たちの目的はオレだろう？ わざわざ他の人間を使うような手間をかける意味がわからないな。」

「意味？ そんなの、あなたを困らせようつてだけの話よ？ あの子だってあなたに復讐したいみたいだし。利害一致でしょ？」

「なるほど、ね。…じゃあ、こいつらを狙う理由は…」

「もちろん。あなたの完全復活阻止の為よ。…この子たちは、カラミティさまの復活には邪魔だもの。…あなたの取り巻きもね。」

一体何の話かわからない成瀬はもちろん、縄に縛られている御剣や伊吹も、状況がつかめないという顔を見せたまま2人の話を聞いていた。

2人は周りにいる成瀬たちをお構いなく、話を続けている。

成瀬の位置からはそのピークの妖艶な表情はよく見え、御剣と伊吹の位置からは神崎のピークを射るような目と余裕の笑みが見える。

「その2人は後ろの坊っちゃんのお友だちなんだ。…返してもらっぞ。」

「あら、その子の為にあなたが動くの？ 珍しい事もあるのね。人嫌いのあなたが人の為に動くなんて…。」

神崎の姿に隠れている成瀬を見ようと、ピークはわざとらしく体を横に傾けた。

目の合った成瀬はきつく睨みつけ、ピークはその目をものともしない余裕の笑みを見せる。

「この子たちに何か秘密でもあるのかしら？」

「しらじらしい…。オレに誤魔化すという行為は無意味な事、お前は知っているだろう。」

「ええ。でも、私は言われた事しかやっていないのよ。だから何も知らないの。」

「オレも教える気はない。…その縄、解く気がないのなら力ずくで動くが…？」

神崎の射るような目は、冷たく凍てつくような目にもなり、ピークはわざとらしく身震いをしてみせた。

「怖い、怖い。…でもあなたがそんな風に人間と一緒にいるなんてね…。その子たちもあの子みたいに不幸にするの？」

「……………」

クスクスと笑いながら口を開いたピーク。

神崎の顔はすつとゆっくり俯き、何も答えず動かなくなった。

「ふふ。…私以上に若い子の魂と命をぞんざいに扱っていると思うけど？ 違うかしら？」

「……。そうならない為にも、お前をここで討っておくか…。」

ボソツと、側にいた成瀬にしか聞こえないような声で呟くと、神崎は瞬時に真っ白な光を体に纏い、電光石火の如くピークに近付いた。

「な…!？」

「お前の力でオレに敵うと本気で思っていたのか？ …自惚れるな。」

ピークの顔に余裕と笑みは消え、突然目の前に現れた神崎に驚く。

声を出した頃には、ピークの体は光を発し、スーッと姿を消してしまった。

代わりに、真っ赤な光の玉が宙を浮いている。

「…何ムキになってんだか…。大人気ないな、オレも…」

ボソツと呟きながら、神崎はその赤い光の玉を、開けた窓から外に放った。

光の玉は空の彼方へと消えていく。

神崎が空を切るように腕を2度振り下ろすと、御剣と伊吹の縄はナイフで切られたように切れた。

「ありがとう！」

「成瀬先輩、神崎。…すみませんでした。」

自由になると、御剣は笑顔で喜び、伊吹は申し訳なさそうに2人に謝った。

だが、成瀬は一度御剣たちの顔を見ると、すぐに神崎に視線を向けた。

当の神崎は窓の外を見たまま、全く動かない。

「神崎。…あれは、魔女…なのか？」

沈黙の続いた中、一番最初に口を開いたのは伊吹だった。

話しかけられると、神崎は伊吹の方に視線を向ける。

「そっだな。」

「…あれが、魔女…」

姿形は同じ人間。

だが、魔女という人間とは異質な存在を目の当たりにした伊吹と御剣は、物思いにふけていた。

正体？

伊吹の問いに答えた神崎は、教室に乱雑に置かれた机に寄りかかり、3人に背を向けてじっと空を眺めていた。

「色々聞きたいことが増えたな。」

「…。」

成瀬が呟くように言い、ゆっくりと神崎に近づく。

一瞬成瀬の冷静な顔を見た神崎だが、すぐに視線は空へと戻った。

「…。」

手が届くくらい至近距離に成瀬が立っても、神崎の視線は変わらないままだった。

だが、力強く左腕を掴まれると、視線だけ成瀬の顔に向かう。

「来い。今度は逃げられないぞ。」

にやりと不敵な笑みを見せると、神崎の腕を掴んだ手が青く光始めた。

「…オレにその術を掛ける？」

「解かれても魔力の痕は残る。逃げられたところで探せるはずだからな。」

「それすら打ち消す事は可能かもしれないのにねえ…。まあいいや。これ以上、この鬼ごっこって奴をやる気はないし。」

面倒くさそうに諦めた様子の神崎は、成瀬に腕を掴まれ、ポケットにしまい込んでいた左手を引っ張り出された。

「うわ…。優ちゃん、これはヤバイって…。」

覗き込むように御剣が神崎の腕を見ると、その腕は最初に見たときよりあきらかに悪化していた。

爛れた皮膚と水が混じった出血。

神崎は成瀬に腕を引かれ、その教室を出て行った。

「？ さとちゃん？」

「…。あ…！ 今行きます！」

何かを考え込んでいた伊吹に声を掛け、御剣も成瀬たちを追ってついでいく。

保健室に辿りついた4人だが、天久の姿はなかった。

代わりに、扉には『職員会議の為不在』という文字が書かれた紙が

貼り付けてあった。

「いないみたいだね…。手当てくらいならやっても大丈夫かな？」

「あ、じゃあ俺がやりますよ。」

伊吹はテキパキと薬棚から消毒液や包帯等を取り出し、準備を始めている。

「お前、治療術が出来ると思ったんだが…、気のせいかな？」

伊吹の後ろで成瀬に腕を解放された神崎は、真顔で伊吹に問いかけた。

手を止めた伊吹だが、返事はない。

「…ああ、なるほど。失敗した事の方が多いのか…。」

「！」

神崎の指摘に驚いた顔で振り向く伊吹。

何も言わない成瀬と御剣だが、その事は知っている様子だった。

「治療術は…、俺はまだ扱えないんだ…」

「扱えるようになればいいだろ？ 実験台になってやる。」

伊吹の側にあった椅子に座ると、神崎はふっと火傷を負った手を差し出した。

「実験台って…」

「オレがこの火傷を放置していたのは、別に治療を拒否していたわけじゃない。…呪符の爆破を受けた時点で、この手はもう使い物にならなくなっていた。だから、他が壊死するまえに切断するつもりだったんだ。今更物理的な治療を受けた所で治るわけがない。」

火傷をしていない右手をスツと左手の上に出し、白い光を放つ。

その光は刃のように鋭い。

「優ちゃん！ ダメだって！」

「左腕全てをダメにしたくはないからな。…呪符に触れた時点でわかりきっていた事だ。今更何を躊躇する理由はない。…だから、どうせ切り落とすしかないものなら、実験台になると言ったんだ。」

御剣にそう答えると、成瀬と伊吹の顔色が曇った。

伊吹は治療術をする事を躊躇っている為に、どうしていいかわからない顔に。

成瀬は、そんな大きな覚悟で呪符に触ったのかとほんの一瞬驚き戸惑った顔になっていた。

「特に治療術は成功した時の感覚を覚えるのが大事なんだ。…やる気があるのなら、いくらでもキツカケは与える。」

「…。」

「伊吹、やれ。」

黙って悩む伊吹。

成瀬が誰よりも先に口を開き、驚いた顔をする伊吹をじっと見据えていた。

「え？」

「俺の目の前で起きた事が原因なんだ。俺も気分が悪い。」

伊吹は成瀬の言葉に、困ったような驚いたような表情を見せた。

成瀬に背を向けている神崎を睨むように言い放つ成瀬に、神崎はまるで視線に気が付いているようにふっと笑う。

「だ、そうだ。…やるならオレの右手に触れて、いつも通り治療してみるといい。」

「…。」

意を決したように、伊吹は神崎の右手に手を置く。

手と手の間から、次第に青白い光を放ち始めていた。

温かいその感覚を感じ取るように、伊吹は目を閉じて集中し始める。

「…。。いくぞ…?」

神崎の顔を確認しながら、伊吹はもう片方の手を、神崎の火傷をした手の上に添えた。

同じように青白い光を放ち、神崎の手は光に包まれていく。

「…。」

運動をしているわけでもないのに、伊吹は滴るような汗をかきはじめた。

それ程集中している伊吹を、御剣は固唾を呑んで見守り、成瀬はただじっと見ていた。

「…ここからはお前次第だな。」

そういうや否や、神崎は伊吹から手を離れた。

伊吹は両手を、神崎が火傷をした手にあて、じっとしている。

光は青くなっただが、変わらず放たれていた。

しばらくすると、神崎の手から光が消えていく。

伊吹も恐る恐る手を離し、神崎の手を確認した。

「さとちゃん！ 大成功だよ！！」

興奮した御剣が伊吹の背中を何度も叩く。

すると、伊吹は不安げな表情で神崎の顔をのぞきこんだ。

「な、なあ？ 本当に大丈夫か？ 感覚がないとか、骨がないとか…、内側は大丈夫なのか？」

「…。…今回はこの通り動くみたいだ。」

握ったり放したりを繰り返す神崎の手は、白い肌に戻っていた。

それに安心したのか、伊吹は崩れるように座り込む。

「よ、よかったあ…」

伊吹は御剣に支えられ、保健室にある椅子に座った。

入れ違うように、成瀬が神崎の前に立つ。

神崎は治癒された手をじっと見つめていた。

「…色々聞きたいことが出来た。答える。」

「ん？ ああ、答えられる範囲な。」

安堵していた伊吹も、喜んでいた御剣も、真剣な顔に切り替わり、神崎と成瀬の会話に耳を傾けた。

正体？

成瀬は腕を組み、見下すように神崎を見据えている。

「まず、俺たちの事に詳しいようだが…。どこまで知っている？」

「そうだなあ…。坊っちゃんの家系は代々狩人の【狩る者】で、何世紀も続いている事。その金髪は【喰らう者】で、種は狼。で、オレの手を治したのは【狩る者】だが、坊っちゃんに仕えている家系の者…。…くらい？」

淡々と説明する神崎に、御剣と伊吹は驚いた顔を見せた。

成瀬は既に聞いていた話を改めて聞いたただけなせい、落ち着いている様子だが、睨む目は鋭くなっていく。

「それで、お前は何に属するんだ？」

「…浄化の力を持った何か。今はそれ以上は言えない。」

「…。」

「言っただろ？ 坊っちゃんたちがある程度力をつけたらいくらでも答えてやるって。」

ふっと神崎が笑うと、成瀬の眉間にしわが寄る。

「…では、あの魔女の名を知っていたようだ…」

「…。本で見たことないか？ カラミティという魔女の名だ。」

「…災厄の魔女…。」

成瀬たちにはカラミティの名前に聞き覚えがあった。

それは、狩人なら一度は耳にする魔女の名前。

神崎は3人が知っていることを確認すると、また淡々と話を進めた。

「ある国で生まれた魔女は、異国で名を馳せた。あのピークはカラミティに感化され、魔女に変化した元人間。何年も前に封じられた8人の魔女のうちの1人だ。」

「何年もって、百年以上前の話じゃないか…？」

「魔女にしてみれば普通の人間の数百年は、魔女にしてみれば数年の感覚だ。」

「魔女って本当に何百年も生きれるんだ…。」

伊吹と御剣が驚き感心している中、成瀬は難しい顔をしていた。

魔女の存在と神崎の存在には疑問が多い。

神崎は自分の事をこれ以上話す気がないとわかると、成瀬が聞くことは一方に固まっていた。

「何故この国の、しかもこの学校に現れたんだ。何か目的があるのか？」

「まあ、漠然とした理由だが…。 “過去の因縁” だな。」

「 “過去の因縁” ？」

「災厄の魔女カラミティに感化された元人間の魔女たちは、性質の悪い事に狩人でもどうにもできないような特殊な力を持っていた。その魔女たちは狩る事はままならず、結局封印という形を取る他なかったんだ。…その魔女たちを封印するのに方法を編み出したのが…。」

神崎の言葉は止まり、じつと成瀬の顔を見据えている。

驚く御剣や伊吹とは違い、なんとなく予感をしていたのか、よほどの事では驚かないのか、成瀬はふむと考え事をするような仕草を見せた。

「俺の先祖か…。」

「方法を作る際、関与していた全員は今ここにいる。…厄介だねえ、狙われるって。」

他人事のように言う神崎を、成瀬は強く睨みつけた。

予想以上の大きな話に、成瀬たちはしばらく沈黙を続けていた。

「ねえ、優ちゃん。俺も聞きたいことがあるんだけど…？」

御剣がおずおずと手を挙げると、神崎は首を傾げて御剣の問いを待った。

「優ちゃんに復讐したい人がいるとか、優ちゃんに取り巻きがいるとか、優ちゃんが聖女様って呼ばれてたりとか…。俺の頭じゃわからない事ばかりなんだよね。」

「…。聖女ってのは、浄化の力を聖女の力と解釈してただけじゃないか？ …あの話は追々だ。」
聞きたかった事の大半ははぐらかされ、御剣の困った顔を見せた。

それに同調するように、神崎も答えられない事に困ったような顔をしながら答えた。

「話さないつもりか？」

「話さないのは今だけ。時が来れば必ず話すし、もしかしたら勝手に知れる事かもしれないがな。」

「なら、貴様の完全復活とカラミティの復活の意味はなんだ？」

「そこは魔女を狩れるようになったらな。…今は実力的に話せない。」

「…。」

はぐらかす神崎に、成瀬も苛付きを見せていた。

流石の神崎も話がまともに進まない事に困ったような顔を見せるが、それ以上話せない話が進む事はなかった。

「もしこのままカラムィティの話に関わる気があるのなら、尚更力は必要なんだ。…今無暗に知識を得る必要はない。」

まともに聞こえる言葉を告げられ、納得のいかない表情を見せていた成瀬が、しぶしぶ納得した。

その様子に安心した神崎だが、何かを思い出し、また睨むように神崎を見据える成瀬に気がつき、成瀬の言葉を黙って待つ。

「何も知らない状態で稜雅も伊吹も捕らえられ、俺も2度狙われている。…随分こちらは不利だと思うが？」

「それこそが實力不足から招いた原因なんだが…。」

やっぱりかという顔を見せた神崎ははあとため息をついた。

もったもな言葉に伊吹と御剣はシユンとするが、その姿を見た神崎が少し考え込む。

「…だが、確かに無駄に危険な目に合わせても困るか…。」

「…こちらの条件をのめ。そうすれば今回の詮索は終わらせる。」

「…条件？」

不敵な笑みを見せる成瀬に、神崎は嫌な予感を感じていた。

この後に出る言葉がなんであっても、厄介な事には変わりないと感じ、はあとため息をつく。

「今後、俺たちの誰かと行動を共にしてもらおう。」

「…。」

命令口調の成瀬に、神崎は案の定かという顔をすると同時に、真剣に悩み込んでいた。

「断るつもりか？俺たちは実力不足だが、お前は魔女に対抗できる力があるんだろ。」

「守れと?」

にやりと言い放つ成瀬に、神崎は呆れていた。

開き直ったようにも取れるその言葉に、呆れたのだ。

だが、呆れた神崎に、成瀬はムツとした顔を見せる。

「少なくとも、俺は守られたいとは言わない。ただ、誰かという間に実力を見る機会はあるはずだ。」

「…。オレといたって良い事はない。現に坊っちゃん狙われただけか?」

「不幸になるとか魔女は言っていたな。…こんな事が不幸か?この現代で、衰退していく狩人の力を発揮できる場が出来たんだ。これほど幸福なことはないと思うか?」

不敵に笑う成瀬に驚く神崎。

すると、御剣もニコニコと満面の笑みで神崎に笑いかけていた。

「そうそう！ それに、優ちゃんが俺たちの正体を知っても怖がらないのは嬉しいな」

「嬉しい…？」

御剣の意外な言葉に驚いた神崎。

横にいる伊吹も御剣と同じように笑っている。

「俺たち、小さい頃は力の制御が出来なくて、時々普通の人間が怖がるような事を起こしたりしていたからさ…。あんまり友だちとかって作りづらかったんだ。だから、神崎みたいに俺たちに理解のある子が友だちになってくれれば、俺たちも嬉しいなあって。」

「俺を含めるな。」

ふんと成瀬が言い放つと、伊吹が苦笑いを見せた。

御剣は口を尖らせ、むっつと声を上げる。

「素直じゃないなー、ツバサは。シリアスな話は終わってるんだからさあ…。」

「勝手に終わらすな。」

「え？ 終わってないの？」

焦るように神崎と成瀬の顔を交互に見る御剣。

成瀬は呆れたような顔を見せ、視線が合った神崎は首を数回振った。

「いいや。真剣になるような話はおしまいだ。」

正体？

呆れたような、でも少し笑った神崎は手をヒラヒラと振った。

「坊っちゃん conditions をのむって事にして、この話は仕舞いだ。」

「やった！」

嬉しそうに喜ぶ御剣と伊吹。

今にも飛びつきそうに御剣は神崎に近付いた。

「じゃあさ！ 改めて自己紹介！」

突如空気は一気に和気藹々と軽くなる。

手をビシッと高く挙げ、御剣は満面の笑みで神崎の前に立った。

「3年A組 御剣 稜雅ですっ！ 実は執行部副部長です 呼ぶ時は稜雅でいいからね？ 俺も優ちゃんって呼んでるし。上下関係って苦手だし……」

自己紹介が終わると同時に、挙げていた手を伊吹に向ける御剣。

伊吹はあっと納得し、遠慮がちに手を顔の位置まで挙げて笑みを見せた。

「2年D組 伊吹 悟。：俺は同じ年だし、別に名前で呼んでも問題ないけど…。俺は神崎って呼ぶな？」

「…。」

伊吹と御剣は同時に成瀬の顔を見つめた。

だが、不機嫌な表情の成瀬は、言葉を発さずに断るとオーラで訴えた。

「ほら！ ツバサは？」

そんなオーラに気が付かない御剣は、成瀬の周りに漂うオーラを打ち消し、ムツと成瀬を見た。

御剣を睨み返す成瀬の顔は不機嫌そのものだった。

「なんで自己紹介なんてしなきゃいけないんだ。」

「お友だちになったら自己紹介するのが礼儀でしょ？」

「…。」

何を言っても口を開こうとはしない成瀬に、御剣は頬を膨らませて怒ったような顔を見せた。

「もう！ 『3年A組 成瀬 翼です！』でしょ？ …ツバサはね、執行部部長なんだよ？」

成瀬の自己紹介を代わりにした御剣は、期待の眼差しで神崎を見る

が、神崎はポリポリと頬を掻いて黙っている。

「クラスすら覚えていないんだが…。…確か同じクラスだったか？」
自己紹介をしてと御剣が目で訴えていたのか、それに気が付いた神崎は伊吹に確認をする。

だが、伊吹が答えるよりも先に、御剣が反応を見せた。

「あ！ そういえばそうだよな？ いいなー、同じクラス…。留年すればよかった…。」

「本気で言っただけで怖いなあ、それ…。」

「本気だけど、ツバサに殺されちゃうよ。…ほら、自己紹介！」
うらやましいと言わなくてもわかるくらいの顔をする御剣に呆れる成瀬。

御剣のテンションはかなり上がっているのか、終始ニコニコしている。

「…2年D組 神崎 優。…まあ、まだ色々言えない事はあるが…。
それでもいいなら、よろしく。」

「はい」

「よろしくな！」

嬉しそうにする御剣と伊吹。

成瀬は早く終わらせたいのか、会話に入ってくる事はないが、話は聞いてはいるようだ。

その3人を見据える神崎は、ふうと一息置いていた。

「…なんかいいねー。生徒会と執行部以外の人で話すのって、ファインですーって来る女の子くらい？」

「先輩たち、モテますもんね。」

「えー？ さとちゃんだって女の子にモテるでしょ？ あと運動部？」

「運動部にモテるのは御剣先輩でしょ。…そういえば、1年の時は神崎もよく声掛けられてなかったか？」

「え！？」

声を上げて驚く御剣の顔は、かなり焦ったような、なんとも言えない表情を見せた。

「ああ、オレを男と勘違いした女子生徒がな…。」

「…。」

神崎の言葉を聞くなり安堵した御剣。

その後ろでは、なんとなく動揺している様子の成瀬に、神崎は気が

付いた。

「え？ 神崎って…、女？」

成瀬と全く同じ顔で神崎の顔を覗き込む伊吹を見て、神崎はああと納得したような顔を見せた。

「…。残念ながら、生物学上では女だ。…稜雅はわかっていたみたいだが？」

「うん。だって女の子の匂いだったし。」

「言ってくださいよ！」

「えー？ さとちゃん2年連続で同じクラスでしょ？ なんで知らないの？」

キョトンとした表情で答える御剣に、伊吹はショックを受けていた。御剣の後ろでも、冷静になろうとしている人間がいる事に気がついた神崎は、ふっと笑う。

「制服と言葉遣いと噂で先入観が出来たわけか…。」

「う…。…申し訳ない…。ひどく失礼な事を…。」

「いや、その坊っちゃんも知らなかったみたいだし、別にいい。」

意地悪く神崎が言うと、成瀬は御剣と伊吹から送られる視線を一切無視した。

その光景が面白かったのか、神崎は薄笑いを見せている。

「女でも男でも、別に特に何かかわる事もないだろ…。」

「えー？ 女の子は男に守られるもんでしょ？」

「なら、さっきは女の子を演じていたって事か？」

ふつと笑いながら神崎が言うと、御剣と伊吹は真剣に悩んだような顔を見せた。

「…。悔しくないわけではないだろうが…。魔女は初めてだったんだろ？ 次は失態しなければいいだけだ。」

「…。ねえ、優ちゃんは魔女と戦った事、何度もあるの？」

「…。あるかもしれないし、ないかもしれない…。」

「…。」

真剣に聞いた御剣だったが、神崎はその問いを見事にはぐらかした。

「ならば、授業には出る。」

「えー…。なんでそうなるわけ？」

「聞きたいことも知りたいことも、それぞれ色々あるからな。今日は終わらせたとしても、機会はあるはずだ。」

「辛抱って言葉を知らんのかね…」

「いいから、時間割を見せろ。」

嫌な顔をしながら、神崎はブレザーのポケットから一枚の折られた紙を成瀬に手渡した。

神崎の手渡した時間割に、成瀬たちは自分の時間割を照らし合わせていった。

「明日一番の授業には俺だな。」

「選りにも選って坊っちゃんか…。」

御剣と伊吹は自分の時間割に印をつけ、それを終わると神崎に手渡した。

まだ授業に出ることに嫌な顔を見せる神崎は、全く乗り気ではなかった。

正体？

成瀬たちは明日の動きを確認しているが、神崎は全く乗り気ではなく、話を聞いているだけでいた。

最初の2時間は成瀬、次の2時間は伊吹と御剣、その次の午後の2時間は伊吹と、神崎には迷惑な事に、全授業に誰かしらがいる形となった。

全く乗り気ではない神崎に、成瀬は追い討ちをかける。

「明日から登下校も共にしろ。」

「…。登下校はいいだろ。大体執行部が終わるまで待てと？」

「だったら執行部の手伝いでもしろ。」

「増やすな。」

頑なに拒み続ける神崎を、成瀬は腕を組んで見下ろした。

「断れる立場か？ 断るのなら他の話全て答えろ。」

「…なんでそうなるんだ…。」

「行動を共にしろと言った条件をのめないのなら、そうなるだけだろ。」

「……………。はあ、厄介だな…。」

考え込むように俯く神崎。

「神崎の親ってそういうの厳しい人？」

「……………。わかった、わかった。相談してから答える。オレ1人でどうこう出来る事じゃないからな。…だから明日だけ勘弁してくれ。」

しばらく考え込んで出した神崎の答えに、成瀬は納得の顔を見せようとはしない。

だが、しづしづその答えをのみ、神崎は難を逃れていた。

「成瀬先輩、執行部の仕事もありますから、今日はこの辺にしませんか？」

「えー？ 俺、まだ優ちゃんといたい！」

「…明日から一緒になれるじゃないですか…。」

「そうだけどさー…。」

名残惜しそうに保健室に留まろうとしている御剣の背中を、伊吹はグイグイと押して保健室の出口まで連れて行った。

「そういえば、天久先生から伝言を預かっていたんだが…。」

「…。ああ、済ませた。…内容は気にしない事。」

成瀬に聞かれる前に神崎は念押しをした。

成瀬は一瞬眉を顰め、すぐどうでもよくなったのか興味をなくしていた。

「行くぞ。…神崎、忘れるなよ?」

「…へいへい…。」

御剣と伊吹は神崎に手を振り、成瀬についていくように保健室を出て行った。

残った神崎は、受け取ったままの時間割に目を通し、はあとため息をつく。

しばらく経つと、天久と月永が保健室に入った。

「執行部の子たち、来てたみたいだね? 何かあった?」

職員会議後、顧問として執行部に立ち寄っていた天久たちは、既に成瀬たちからここにいたという報告を受けていた。

その上、けだるい雰囲気です座っている神崎を見た天久は、何かあったと感じ取っていた。

「…登下校を共にしろと言われた。…厄介な話だ。」

「登下校!？」

「学校生活中は君を監視しようって事かな？」

「そんな所だろう。…まだ話せない事を聞かない代わりに条件として、な…。」

「凄いな、成瀬くんって。」

感心しているような、哀れんでいるような複雑な苦笑いで、天久は神崎を見る。

「で、どうするんだ？ 登下校。」

「…。したくはないが、なんとかするしかないだろ…。幸い、悟はオレの親が厳しい人間ではないかと気にしているからな。」

「…厳しい、ねえ…。厳しいって事にしておけば、誰も君に手を出さないんじゃない？」

「手？ 出してなんの得が…。…いや、そうしておいた方が厄介事を持ってこないか…。」

「そうそう　じゃ、厳しいって事で。」

につこり答える天久に、神崎はそうだなと答えた。

神崎は全く気にしていないが、月永には天久の目が異様な雰囲気を放っている事に気が付いていた。

「…なんか、璃人の目が怖いんだが…。」

「気のせいだよ。」

笑った顔でも目は笑っていない。

月永は青ざめた顔で天久から目を背けていた。

「あの坊っちゃん、結構強引なんだな。」

はあとため息をつきながら、神崎は保健室にある長椅子に座り、しみじみ口を開いた。

そんな姿を見た月永は、なんとなく面白そうな顔をしている。

「なんか…、疲れてるな。子どもの相手は苦手か？」

「…。」

月永の顔をじつとただ見据える神崎。

その目は髪で見えないはずなのに、月永には睨まれているような気がして仕方がなかった。

その姿に苦笑いを見せる天久は、まあまあと神崎をなだめる。

「でもまあ、今回は仕方ないだろ？」

「…おかげさまでな。」

「なんか今トゲが刺さった気がする。」

「トゲでよかったな。次は木の杭でも刺すか？」

「結構です…。」

ほんの一瞬ギラツと見えた神崎の鋭い目を見せると、月永はシユンと縮こまる。

また天久がまあまあとなだめると、天久は申し訳なさそうに苦笑いを見せた。

「ごめんね？ 厄介事を頼んでしまって…」

「…。お前等なりの配慮なんだろう。何も文句は言わん。…ただ…」

「ただ？」

「扱いづらい。1人は自己中心的。1人は怠慢。1人は経験不足。…いくら潜在能力に見込みがあるとは言え、骨が折れる。」

「経験不足はともかく…。怠慢と自己中は困り者だな。」

同時にため息をつく3人。

更に頭を押さえながら、神崎がより深いため息をつく。

「おまけにヘルツの気配が強くなっている…。」

「うっわ…。」

「…厄介だね…。」

同じように月永と天久も深いため息をついた。

「あの3人の中の誰かの力が狙われるはずだ。…ヘルツはお前たちの事を知っている。おそらく正体がバレるだろうが、その方が動きやすいだろ。」

真剣な表情に変わる3人。

秘密がバレる事は面倒な事と同時に、確かに動きやすくなる。

月永と天久は複雑な表情を浮かべていた。

そんな中、神崎は何の感情も見せず、ただただ時間割を眺めていた。

暴走？

次の日から、神崎は執行部の成瀬、御剣、伊吹と学校生活の大半を共に過ごす事になった。

登下校だけは免れたものの、神崎は学校生活で受けるほとんどの授業を3人の内の誰かと受けていた。

最初こそ授業に現れた事に教師たちが驚いていたが、留年生徒がなくなる可能性が出来たと喜ぶ教師も少なくはない。

ただ、行動を共にしろと言われてただけで、大体の授業は何もしていない。

体育系の授業も、見学と称して不参加でいる。

課題も提出物も、その他諸々一切手をつけてはいないが、伊吹以外は何も言わない為か、神崎は伊吹と受ける授業以外は机と一体化している。

梅雨になり、月はもう6月中旬。

ある異変が起き、神崎の授業をサボる時間が増えたことに成瀬が気が付いたのはこの頃だった。

「おい、神崎。」

「…。」

「ちよ、成瀬先輩！ そんな分厚い本で叩いたら鞭打ちになっちゃいますよ！」

神崎は5階のバルコニーにいる事が多く、その日も壁に寄りかかって座ったまま俯いていた。

成瀬は呼びかける前に本を神崎の頭に落とし、鈍い音を響かせた。

当の神崎は痛みもせず、ただ面倒くさそうに顔を上げ、慌てる伊吹の顔と見下している成瀬の顔を確認していた。

「…お前は何故ここにいるんだ？」

「オレは誰もいない授業には出ないから。」

「やっぱり…。御剣先輩、授業出てないんだ…。」

困った顔の伊吹は、難しい表情を浮かべた成瀬の顔を見た。

神崎は興味なさそうに壁に寄りかかり、空を見つめている。

「いつからだ？」

「6月上旬。」

「執行部に来なくなってきたのも、そのくらいです。」

「…何を考えているんだ、アイツは…。」

成瀬も伊吹も、ベタベタされてきた神崎でさえ、ここ最近では御剣の姿を見ていない。

学校には来ているが、授業には参加していないのだ。

複雑な表情を見せる成瀬と伊吹に、神崎は首を傾げる。

「さすがに一回感じ取ったくらいじゃ気が付かないものか…。」

「…。」

「え？ …この感じ、やっぱり魔女？ 気のせいじゃないのか？」

成瀬にも伊吹にも、何か思うところはあろうと、神崎の咳くような言葉をきっかけに顔色が変わる。

神崎は表情の変化を確認するように見ると、何気なく空を見上げはじめた。

「…勘違いかどうかは確認すればわかる事だが、な…。…今はやめておけ。」

「…どういう事だ？」

「強制じゃなくアドバイスだ。どう判断つけるかは自分たち次第だな。」

「…。」

興味なさそうに答える神崎に、伊吹は困惑し、成瀬は神崎を睨みつけていた。

「神崎、何か知っているのか？」

「知っているが、…まだ推測の範囲だな。証拠も何も無い。」

「その推測を答えろ。」

「…聞き方は他にないのかね…。」

空にその向かって言うが、成瀬は訂正するつもりがないようで、神崎を睨み付けたままでいる。

神崎は少し間を空けて口を開いた。

「今は魔女の気配がする。そして稜雅の様子がおかしい。2つの事柄はそれぞれか、それとも1つか…。」

「例えば1つだとすれば、御剣先輩は巻き込まれているって事になる…?」

「まあ、八割方巻き込まれてる…。いや、当事者と化してるかもしれないな。なにせよ、オレは今は詮索しない事をオススメするよ。」

「…その理由を言わないつもりか？」

うーんと唸る神崎。

その中途半端な沈黙が気に喰わない成瀬の眉間はどんどんしわが深くなつていく。

「…。言わなくもないんだが…。何せ段取りが悪くてな。もう少し時間が欲しいんだ。」

「何を企んでいる？」

「人聞きが悪いな。…。いや、信じてろって方が無茶か。」

「まあ、ね…。でも、その段取りが出来たら話してくれるんだろ？」

「…。出来たら、な。」

「なんか、不安な言い方だなあ…」

「ああ、オレも不安というか疑っているからな。しくじったら一部始終の尻拭いはオレがする事に…」

伊吹と会話している間、神崎の顔色が一気に変わっていく。

ピタッと動きが止まったかと思えば、はあといつになく大きなため息をつくくと、ガクツうなだれた。

「？」

「…。坊っちゃんたちはこの後授業は？」

「いや、全くないよ。」

「なら……。…オレの条件がのめるんなら、付いてくるか？」

「条件、だと？」

「これから坊っちゃんも悟も、絶対に動かない事。声を出さない事。…特に質問に答えない事。」

「なんか、よくわからないけど…。」

「それで稜雅の居場所と異変の理由がわかるんだな？」

神崎は気だるそうに立ち上がり、大きく伸びをしながら2人に問いかける。

伊吹は戸惑い、成瀬はかなり機嫌が悪くなったものの、仕方ないというしぶしぶの表情を見せた。

「わかった。条件をのもう。」

「…これから行く先で、オレが結界を張っておく。その中から何があっても絶対に出るな。」

神崎はそれだけ伝えると、床に大きな魔法陣を描き始めた。

どうぞと魔法陣の中に伊吹と成瀬を招き入れると、魔法陣は強く真っ白な光を放った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8643s/>

狩人

2011年10月8日16時55分発行